

孤独な散歩者の夢

本PDFは『孤独な散歩者の夢』（2012年9月光文社刊 本体990円+税）本編のサンプル版です。
株式会社光文社の許可なく本ファイルを販売・改変することは著作権法違反となります。
また、本ファイルのコピー・転載はご遠慮ください。
本編とは一部ページ順が異なります。

光文社 古典新訳 文庫

孤独な散歩者の夢想

ルソー

永田千奈訳



光文社

Title : LES RÊVERIES DU PROMENEUR SOLITAIRE

1782

Author : Jean-Jacques Rousseau

『孤独な散歩者の夢想』 目次

第一の散歩

第二の散歩

第三の散歩

第四の散歩

第五の散歩

第六の散歩

9

24

42

69

103

123

第七の散歩

第八の散歩

第九の散歩

第十の散歩

訳者あとがき

年譜

解説

中山元

320 314 228

222

195

173

145

第一の散歩

この世にたったひとり。もう兄弟も、隣人も、友人も世間との付き合いもなく、天涯孤独の身。私ほど人付き合いが好きで、人間を愛する者はいないというのに、そんな私が、満場一致で皆から追放されたのだ。繊細な私の心を最もひどく痛めつけるにはどんな仕打ちがいちばんいいのか、奴らは私への憎悪を極限まで募らせながらさんざん考えたのだろう。そして、奴らと私をつなぐすべてを乱暴に断ち切った。相手がどうであろうと私は人間を嫌いにはなれなかった。つまり、人間でなくなることでしか、私と完全に縁を切ることはできないのだ。もはや彼らはまったくの他人であり、見知らぬ人も同然であり、私にとって何の意味もない存在になったが、それは彼ら自身が見望んだことなのだ。だが、そういう私は、皆から切り離され、すべての関係を断ち切られた私は、いったい何者なのだろう。今、唯一私にできることは、自分が何者

なのかを探求することだけだ。だが、それには、まず、自分のおかれた状況について把握することが必要である。気分のいいことではないが、致し方ない。世間による迫害から自己の探求へと考えを深めていくには、どうしても現状把握が避けては通れないのだ。

このような妙な立場に追い込まれてから、実に十五年以上が過ぎようとしているのだが、私は今でも現実として受け入れられずにいる。食べすぎで胃がもたれ、夢見が悪かっただけで、目が覚めれば、友人たちとは元通りの関係が続いており、苦しみから抜け出すことができるのではないかと、いつまでも思い続けている。ああきつとそうだ。自分でも気づかぬうちに眠り込んでしまっただけなのだ。いや、生から死へ飛び込んでしまったのかもしれない。何があったかは不明だが、この世の秩序から引き離され、訳の分からない理解不能な世界に真つ逆さまに落ちていったとしか思えない。今の状況について考えれば考えるほど、私は自分がどこにいるのか分からなくなってくる。

こんな運命が待っていようとは、予想だにしていなかった。今になっても、まだ、自分のおかれた状況が理解できていないのだ。昔と同じまま、今と同じままの私が、

この先もずっと怪物や、他人に毒を盛った者や、誰かを暗殺した犯罪者であるかのよ
うに、何の躊躇ちゆうちよもなく決め付けられ、後世に伝えられるなどということが常識的に
考えてありえるだろうか。この私が、人類の敵となり、下劣な人々の餌食とならねば
ならないなんて。すれちがう人たちが私に次々と挨拶がわりに唾を吐きかけ、老いも
若きも一致団結して私を生きたまま葬り去ろうとするだなんて、ふつうに考えて想像
できるものではないだろう。こんな思いもよらない転覆に不意をつかれ、当初、私は
ただただ呆然とするばかりだった。動揺と憤慨のなかで悪夢のような日々を過あごし、
ようやく落ち着きを取り戻すまでに十年かかった。いや、それでもまだ平静になれな
いくらいだ。その間にも、私は失敗や間違い、軽率な行動を繰り返してしまった。今
にして思えば、不注意なことをしたものだ。私を追放した首謀者たちは、そんな私の
慌てぶりに便乗して、私の汚名をさらに確固たるもの、もう二度と返上できないもの
にしてしまったのだ。

私は長いあいだもがき、抵抗を試みたが、どうにもならなかった。器用に巧妙に立
ち振る舞うこともできず、知らん顔を装うことも、慎重になることもなく、ただ馬鹿
正直にあけつびろげに、焦ったり、怒ったりしていたので、抵抗すればするほど事態

は悪化するばかりであり、奴らが容赦なく攻撃する種となるようなことを次々としてかしてしまつたのだ。何をしても空回り、さんざん無駄に苦しんだ挙句、必然的なことには逆らわず、ただ運命に身をまかせるしかないという結論に達した。こうして諦めてみると、これまでの苦痛がすべて埋め合わされるほどの平穩を見つけ出すことができた。この平穩こそ、諦めが私にもたらしたものであり、つらく報われることのない抵抗を続けていたときには、得られなかつたものである。

私が平穩を取り戻すことができたのには、ほかにも理由がある。私を攻撃した者たちは、あらゆる形で私への憎悪を極限状態までもつていこうとした。だが、奴らは激情のあまり、一つ忘れていたことがある。私を苦しめ続け、日々苦しみを新たにするような状況におきたいのなら、たえず新たな攻撃を加え、じわじわと攻撃を強めていくのが最も効果的だつたはずだ。もしわずかでも希望の余地が残されていたなら、たとえそれが彼らの巧妙な罠であつても、私はその希望にすがろうとし、今でも諦めきれずに苦しんでいたことだろう。そして、彼らは私を騙しだま、もてあそび、期待させてはまた新たにその期待を裏切ること、私を苦しめ続けることもできたはずだ。だが、彼らは、最初からあらゆる策を出しつくしてしまつた。私からすべての希望を奪うこ

とで、彼らは私をいたぶる機会を自ら手放してしまったのだ。彼らが私に浴びせかけた罵詈はら、誹謗ひぼう、嘲笑、汚辱はすでに頂点に達しており、弱まることはないにしろ、これ以上ひどくなりようもない。要するに、双方とも早々に限界に達してしまっただのだ。あちらは最大限の攻撃を加えようと必死になり、こちらはこちらで最悪の状態に必死に耐えるばかりだった。敵側は、私を最大限に痛めつけようと急ぎすぎた。もはや、地獄の助けを借りようとも、人の手で可能なあらゆる策略を出しつくしてしまい、これ以上は何もできなくなっている。肉体的な苦痛を与えようにも、こうした苦痛はさらに苦しみに追い打ちをかけるかに見えて、実は精神的な苦痛から気をそらせる効果をもつ。痛い、痛いと言をあげれば内に秘めていた苦痛を発散させ、肉体の痛みによって心の痛みを忘れることができるのだ。

もうすべて出しつくされてきているのだから、何を恐れることがあるう。これよりもひどい状態はないのだから、もう彼らにはこれ以上私を脅かしようがないのだ。不安と恐怖という苦しみから、彼らは私を永遠に解放してくれた。それについては安堵している。今、現実にある不幸など大して重要ではない。現在感じている苦しみについては、きちんと受け入れることができる。だが、この先、襲ってくるかもしれない苦し

みを心配し始めると耐えられなくなるのだ。こうなったらどうしようかと怖々ながら想像すると、頭の中であらゆる不幸が組み合わさり、何度も反復するうちに拡大、増幅していく。実際に不幸になるより、いつどんな不幸が襲ってくるのかと不安にびくびくしているときのほうが百倍もつらい。攻撃そのものよりも、攻撃するぞという脅しのほうがよほど恐ろしいのだ。実際にことが起こってしまえば、あれこれ想像を働かせる余地はなく、まさに目の前の現状をそのまま受け入れなければならないのだ。実際に起こってみると、それは私が想像していたほどのものではないことが分かる。だから、私は不幸のど真ん中にあっても、むしろ安堵していたのだ。こうして現在は、新たな不安を抱くこともなく、へんに期待することもなくなっている。慣れしてきたというだけでも、現在自分がおかれている状況が徐々にそれほど苦痛でもなくなってきたというわけだ。なにしろ、今以上に悪くなるはずはないのである。時間がたつにつれ、感情は生々しさを失い、奴らがどうあがこうが、もはや負の感情を再燃させるようなことは起こりようがないのである。要するに、私を攻撃する者たちは、感情の高ぶりにまかせてあらゆる策を出しつくしたことで、逆に私を助けてくれたのだ。彼らはもはや私を支配することができない。今や私は彼らを鼻で笑うくらいの余

裕があるのだ。

とはいえ、私が心の平穩を取り戻してからまだ二か月もたっていない。とつくの昔に怯える気持ちはなくなっていた。だが、それでも私はどこかで期待し続けていたのだ。わずかな希望を掻き立てられ、やがて失望し、それがきっかけになって狂おしいまでの思いがあれこれと湧き上がり、平靜ではいられなくなったものだ。ところが、ある悲しい出来事、思いがけない出来事によって、ついにかほそい希望の糸も断たれた。もうこれ以上、期待しても無駄だということが、これではつきりしたのだ。そこで私はようやくきっぱりと諦めがつき、心の平穩を取り戻したのだ。

陰謀の全体像が垣間見えた瞬間、私は命あるうちに世間にもう一度認めてもらおうなどという考えをすっかり永久に捨て去った。向こうが一方的に縋^よりを戻そうとしても、私がもう彼らの側に戻るつもりがない以上、そんなことは意味がない。たとえ世間が私のほうに歩み寄ろうとしてきても、もはや私はかつてのような私ではないのだ。私は世間に対し軽蔑の念を抱くようになっており、人々との付き合いなど、もはや味気ない、わずらわしいものとしか思えなくなってしまった。他人とともに生きる人生がどんなに幸せなものであろうと、私は孤独のなかで生きるほうが百倍も幸福に感じ

る。奴らのせいで私は、人付き合いにいつさいの喜びを感じなくなつてしまつた。私ほどの年齢になると、そうした喜びが再び生まれることもないだろう。もう遅いのだ。人々が私に優しくしようかと冷たくしようと、もう私は彼らに関心がない。あの人たちが何をしようとも、私はもう同時代の人たちにまったく興味がないのだ。

だが、未来についてはまだ希望をもっていた。いつか、新しい世代のもつと優秀な人たちが、現在私に与えられている評価、そして、世間の私に対する態度をきちんと検討し直してくれるのではないか。さらには、陰謀の首謀者たちが仕組んだ虚偽をやすやすと見破り、私の本来の姿を認めてくれるのではないか。そんな希望を抱いていたからこそ私は『ルソー、ジャン・ジャックを裁く——対話』を書き上げ、なんとしてでもこの書を後世に残そうと手を尽くしたのだ。実現する日が遠いことは分かつていても、つつい将来に希望を抱き、同時代の人たちに理解を求めていたところと同じような気持ちの高まりを覚えた。遠い将来に希望を抱いたところで、同時代の人々にもてあそばされる現実が変わらない。私は『対話』のなかで、なぜ将来にこのような希望を抱くようになったのかを書き綴つた。だが、あれは間違いだつた。早々に間違ひに気がついただけでも幸いである。おかげで、何とか生きているうちに実に平穩で絶

対の安息といえる時間をもつことができたのである。こうして、私はある時期から穏やかな時間を取り戻した。そして、もう二度と以前のように心を騒がせたりはしないはずだ。

さらに、つい最近、あらためて思いをめぐらしているうちに、たとえ将来の人々についてでも、世間に期待し、未練を感じるのは馬鹿げていると気がついた。私を憎んでいる組織のなかでは次々と新たなリーダーが生まれ、そのリーダーたちが世間を先導していくのだ。個々の人間は死んでも、そうした組織はなくならない。人が変わっても、組織の抱える情念は変わらない。彼らの激しい憎悪は、悪魔のように不滅であり、同じように作用し続けるのだ。私を敵視する人たちが死に絶えても、医者やオラトリオ会1の会員は存在し続けるだろう。この二つのグループ以外にも私を敵視する人間はいるかもしれないが、少なくとも、この二つのグループの連中に関しては、きっと、私の死後も、生前、私自身を攻撃したときとまったく同じように、私の残した思ほうとくい出を冒瀆し続けるに違いない。確かに私は医者たちを侮辱した。だが、彼らについ

1 研究、教育を中心に活動するカソリックの在俗司祭の団体。イタリアで十六世紀に結成された。